

賤ヶ岳の戦いで 勝家が本陣を置いた 幻の玄蕃尾城

天正11（1583）年、織田信長がたおれた後の天下の覇権を賭けて羽柴秀吉と柴田勝家が激突した賤ヶ岳の戦いで、勝家の本陣となった玄蕃尾城（内中尾山城）。越前、敦賀と近江柳ヶ瀬との国



玄蕃尾城跡

境、内中尾山山上にあり、湖北から北庄に向う北国街道と、それより分岐して敦賀津へ向う刀根越の道を同時に抑える位置にありました。玄蕃尾城は、天正10（1582）年6月の本能寺の変後、勝家が秀吉との戦いに備えて築城したといわれていますが、それ以前、北国街道を整備した天正6（1578）年頃に、越前衆を動員して築いたとする見解もあります。また、地元の刀根区には玄蕃尾城の築城に当たって寺のお堂の木材を提供したという伝承も残っています。

ところで、史料には「玄蕃尾城」という名はどこにも出てきませんが『近江国輿地志略』に「中打尾山

：（略）…柴田勝家陣取の処也、此処より行市峯迄一里半、幅三間の作道也」とあり、この幅三間の作道について、刀根区では「玄蕃尾城の南方の行市山砦に布陣した勝家配下の佐久間玄蕃盛政が、勝家本陣との連絡のため馬で駆け抜けられるよう開いた尾根道である」と言い伝えられています。この尾根道を玄蕃ヶ尾と呼び、転じて本陣の城の名を指すようになったのが、玄蕃尾城の由来であると伝わっています。

玄蕃尾城は、勝家撤退後手つかずのまま残されていたことから、山城の構造が合戦当時のままに良好に保存されています。またその構造は、各郭（石垣や堀などで囲まれた区画）の機能分化と配置、馬出（城門を守るためにその前に設ける土塁など）の完成度などから、高度な築城理論で統一された織豊系山城の最高水準を示すものだといわれています。

一方で、その歴史については明確な記録が残っておらず、長らくその位置が不明になっていました。地元の伝承によると、帝国陸軍が陸戦の参考とするため賤ヶ岳の戦いの調査をした際にも、この玄蕃尾城跡は見つからなかったといえます。その後、東愛発小学校に赴任し、後に敦賀市史の編纂にも携わった先生が、刀

根区に残された伝承を頼りに地区の人々と山中を探索し、ようやく発見に至ったのです。雪深い北陸の山中にあつて遺構の残りの大変良い点などあわせて、まさに奇跡の山城なのです。

関連史料・ゆかりの地

刀根区に残る
柳ヶ瀬トンネル・
小刀根トンネル



柳ヶ瀬トンネル（明治17年開通）



小刀根トンネル（明治14年開通・敦賀市指定文化財）

敦賀と近江の峠道は日本海海運と琵琶湖水運を結ぶ重要なルートであり、幾度も戦乱の舞台となりました。明治15（1882）年、日本海側で最初の鉄道が敦賀で開業、やがて滋賀県長浜と結ばれます。最初の鉄道ルートとなった刀根区内には国内でも屈指の古さを誇る鉄道トンネルが残されています。